

編集者の生きた空間——東京・神戸の文芸史探検 目次

第I部 編集部の豊穰なる空間 1

第1章 砂子屋書房編輯部の面々——「文筆」の随筆から 2

第2章 第三次「三田文学」編集部 の面々——山川方夫と四人の仲間たち 20

第3章 続・第三次「三田文学」編集部 の面々——秋の古本祭りと月の輪書林目録から 41

第4章 元、河出書房編集部 の面々——『追悼・氏野博光』を中心に読む 59

第5章 ある元河出書房編集部者の軌跡——小石原昭氏と瀬沼茂樹氏の長きつきあい 72

第II部 編集者の喜怒哀楽 89

第6章 彌生書房、女性社長 の自伝を読む——津曲篤子『夢よ消えないで』から 90

第7章 あるヴェテラン児童文学編集部者の喜怒哀楽——相原法則氏の歌集を読む 99

第8章 元創元社編集部者、東秀三氏の未読の小説を読む——「文学雑誌」四冊から 109

第9章 著者の怒りにふれる編集部者の困惑 118

第10章 中央公論社、ある中堅編集部者の珍しい怒り——杉本秀太郎氏のエッセイから 123

第11章 宮脇俊三『私の途中下車人生』を読む——中央公論社の編集部者時代 131

第III部 神戸文芸史探検抄 137

第12章 エディシヨン・カイエの編集部者、阪本周三氏の生涯と仕事——幻の詩集を見つけるまで 138

第13章 戦後神戸の詩誌「航海表」の編集部者とその同人たち——竹中郁と藤本義一、海尻巖を中心に 169

第14章 林喜芳氏らの同人誌「少年」44号を読む——青山順三氏、佃留雄氏の追悼を中心に 193

第15章 兵庫の歌人、犬飼武『後夜』（雑文集）を読む——木村栄次、中村為治先生との交流を中心に 213

第16章 英文学者・中村為治の人と生涯——照山頭人氏の論文から 237

第17章 「一九二〇年代の関西学院文学的環境の眺望」を読む——大橋毅彦氏の論文から 242

第18章 神戸文芸史関係の古本探検抄——林五和夫、妹尾河童、青木重雄、及川英雄のことなど 249

第IV部 知られざる古本との出逢い 261

第19章 海港詩人倶楽部の詩人と土田杏村・山村暮鳥往復書簡——橋本実俊『街頭の春』をめぐる 262

第20章 鴨居羊子さん再び／田能千世子『金髪のライオン』を読む——付・港野喜代子さんのこと 274

第21章 ある女性文学者の、師への類まれなる献身——小寺正三氏と加藤とみ子さんの深い交流 282

第22章 布施徳馬『書物のある片隅』（I～X）を読む——貴重な私家本との出逢い 297

あとがきに代えて 305

第1章 砂子屋書房編輯部の面々——「文筆」の随筆から

平成二十六年、秋の四天王寺の古本祭りの折、「シアル」さんのコーナーで、箱の中に「書物往来」とか「書物展望」といった戦前の書物関係の雑誌が並んでいるのが見えたので、これは何かあるかも、との予感がして順々にチェックしてゆくと、はたして、その中に「文筆」（砂子屋書房、非売品、昭和十五年十月、五周年記念号、昭和十六年六月号）が二冊も姿を現わしたので、ドキドキと胸が高鳴った。実はその少し前、偶然だが、林哲夫さんの個展で古本も販売しており、その中にこの「文筆」（別の号）も一冊、積まれた雑誌の中にあつたのを見ていたので、初見ではない。それにしても大へん珍しい雑誌が出てきたものだ。個展で見た折も目次を見て錚々たる作家の短文が満載されており、太宰治や私に関心のある衣巻省三（稲垣足穂の級友で、短篇集『パラピンの聖女』『黄昏学校』などの著者。詩人でもある。）の一文も目次にあつたので、喉から手が出るほどほ

しかったのだ。しかし、林さんにしてはたしか一万二千元と高く付けていたので（それでもかなり安いらしい）、涙をのんで断念したのである。林さんも以前掘出しで、見つけたものようだ。

それに比べると、表紙は汚れているにしてもけっこう安めの値段である。私は、これは貴重な資料になる、と乏しい財布の中身を気にしながらも、思いきって二冊共、求めることにした。（いや、正直に言います。その日は予算が足りず、安い方を一冊だけ買って帰ったのだが、やはりもう一冊もほしくなり、次の日も出かけ、置き場所が移動していたので、すわ、もう買われたのかと焦って、探すのに苦労したが、やっと見つけて手に入れました！）

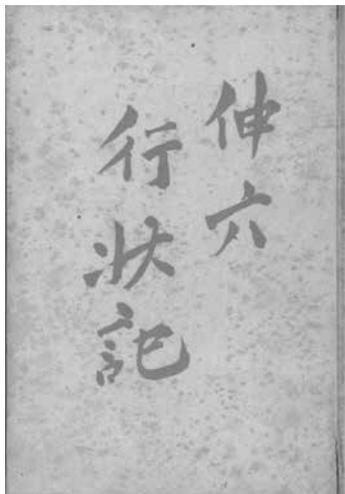
さて、砂子屋書房といえ、規模は小さくても昭和十年代の文学史を語る際に欠かせぬ大切な出版社であり、とくにその「第一小説集」叢書は外村繁『鵜の物語』、太宰治

『晩年』、尾崎一雄『暢気眼鏡』、田畑修一郎『鳥羽家の子供』を始めとして、昭和文学史に残る錚々たる名作が並ぶ。文学好きの古書通には今でもファンが多く、古書価も高い本が多い。装幀は文字だけのシンプルで渋いものが多く、殆んどは書房主、山崎剛平によるもののようなのだが、和紙を使つて丁寧に造られている。私も昔から関心があり、私の場合、裸本で安いもの中心だが、少しずつ蒐めてきた。仲町貞子『梅の花』、井上友一郎『波の上』、庄野誠一『肥った紳士』（千六百部）、岡田三郎『伸六行状記』（千二百部）（題簽は尾崎士郎）、岩越昌三『石生藻』など、いずれも独自の魅力的な小説集である。中でもとりわけ岡田三郎のものは、岡田氏が博文館に編集者として勤めていた頃の体験に基づいてユーモラスに描いた短篇集で、抜群に面白かったのを憶えている。いつか再読したいものだ。

単行本としては、「文筆」五周年号の巻末広告欄を見ると、それまでに百冊近く出たようだが、砂子屋書房から出した雑誌については、これまであまり知られていないのではなからうか。どんな珍しい本でもあるという、あきつ書店の目録によれば、『砂子屋書房本』（限定90部）が出ており、そこには書影入りの単行本書誌の他に『文芸雑誌』『文学生活』そして『文筆』の細目まで記載されているという。前二者は今まで全く知らず、むろん私など見たこと

もない雑誌だ。

砂子屋書房については、書房の本造りに主人の山崎剛平とともに深くかかわった浅見淵と尾崎一雄が各々『昭和文壇側面史』と『あの日この日』（下）で詳しく回想してい



るので、素人の私などが今さら書くこともないほどだが、今回見つけた「文筆」を読むと、細かな点で両書には言及されていないエピソードや裏話もリアルタイムで出てくるので、少しだけ要約しつつ紹介してみようと思う。（その際、事実の補いなどは尾崎の『あの日の日』を適宜参考にしている。）

「文筆」五周年記念号でとくに興味深いのは、砂子屋編輯部の佐伯哲太（後述）からの依頼で創業当時の思い出やその軌跡を六人程が書いていることだ。順番に紹介してゆこう。

まず浅見淵「創業の頃」から。砂子屋書房は昭和十年十月十日創業した。昭和十年の秋頃、浅草の「宇治ノ里」という小料理屋で一杯飲みながら、山崎氏、古志太郎とともに、文壇関係に出ず開業挨拶状の宛名書きをした。早稲田大の同級生のこの三人で書房の仕事を始めた。まず、第一創作集を浅見氏が企画し、外村繁、仲町貞子、太宰治、尾崎一雄の順で出し、並行して小さな文芸雑誌も出したという。これが前述の『文芸雑誌』であろう。

外村氏の『鵜の物語』は印刷屋の不慣れと製本屋の落丁などで予定より大分遅れたという。これについては入手した「文筆」昭和十六年六月号で、外村氏も当時を回想している。何かの会合があった帰り、新宿の街上で、浅見氏か

ら突然出版の話を持ち出されたという。タイトルも浅見氏が提案したものに従った。本が出来上る予定の日、砂子屋（山崎氏の自宅）へ出かけたが、まだ届いてなかったのので、山崎、浅見氏と三人でタクシードで峻明社という印刷所へ駆けつけた。ここは、外村氏が同人誌「麒麟」(筆者註・田畑修一郎が中心になって昭和八年に出した)に「鵜の物語」を発表したときの印刷所^(註)だった。夫婦が出てきたが、代金と引換えでないと、心配して本を渡ししづっていた。説得して安心させ、見本を見ると、山崎氏が「あつ、いけない」と大きな声を出した。頁が逆になっていたのだ。調べてみると一部分だけだったが、他に落丁本もあった。(戦前の本には時々製本がずさんなものがあり、古本でたまに見かけることがある。)

外村氏の本の奥付発行日は十一年二月十五日。刊行直後に二・二六事件が勃発した。その影響で検閲が急に厳重になり、本書の一部削除を命じられる。そのため、本屋や書房の在庫が売り物にならなくなってしまった。この時期が書房の最受難期で「文芸雑誌」も廃刊したが、第一創作集だけは約束していたので続刊した。ところが太宰氏の『晩年』を先に出して延び延びになっていた尾崎氏の『暢気眼鏡』が昭和十二年度前半の芥川賞を受け、その後出した和田伝の『沃土』も新潮賞をとったので、どちらも増刷を重

ね、経営が順調に軌道に乗ったと回想している。（『晩年』も増刷したが、太宰自身の随筆によれば、それでも元版は計二千部位売れたにすぎないようだ。）

次に古志太郎の「思ひ出すまゝ」。前述の三人は十人ばかりの国文科のクラスメートだった。「その頃の山崎君は、尾崎君もそうであったと記憶するが、端然たる美少年だった。」学生時代はあまりつきあいがなく、卒業後も会社員や女学校教師をやったり、稲垣達郎君と「演劇」という雑誌を出したり、結局は「新築地」劇団の文芸部に入り、無茶な生き方をしていた。丁度その頃、郷里の兵庫の赤穂郡上郡町の酒造店から両親を呼び寄せ上京していた山崎氏と新宿の不二屋で偶然再会するも、ろくに話もせず別れてしまった。それから、氏は演劇方面の才能に見切りをつけ、文学の再勉強を開始した。ある日、ふと思いついて桜木町の山崎氏宅を訪ねた。ようやくうちとけて、互いに文学への執着を語り合った。浅見氏のプランで「文芸雑誌」を出したが、五号でつぶれたという。次に出した「文筆」に初めて小説らしい「帰郷」を発表したというが、これは「文学生活」の記憶違いかもしれない。「文筆」は小随筆ばかりの書房のPR雑誌だから。『あの日この日』によれば「文学生活」は「木靴」同人と「文芸レビュー」同人の合作で、十一年六月創刊された。五号までは主張社から、六

号から砂子屋から発行されている。私があつと思つたのは、同人の中に創元社東京支店、編集長だった岡村政司もいたことだ。最後に古志氏は四十代を前にして『山陰』が出せたのは、山崎、浅見、尾崎氏など旧友の温い友情によるものだと感謝している。古志氏は戦後『紅顔』を出しているが、私は見たことがない。

次は尾崎一雄の「暢気書房昔話」に移ろう。冒頭は「そのうち「暢気書房」と云ふ小説を書いてやらうかと思つてゐる。砂子屋書房をモデルにするわけだが、僕は砂子屋の暢気さにはかねがね呆れてゐるのである」と書き出されている。これが具体化したのが、おそらく戦後になって書かれた『もぐら横丁』（池田書店、昭和二十八年）所収の「ぼうら横丁」ではなからうか。この小説は昔入手して面白く読んだ。この随筆では、砂子屋書房のざつとした歩みを綴っている。昭和十二年、氏の『暢気眼鏡』を出したのを機会に「早稲田文学」編輯者を辞し、浅見氏と入れ違いで砂子屋を手伝うようになった。

『あの日この日』にも詳しく描かれているが、『暢気眼鏡』が三月に五〇〇部（第一創作集は皆五〇〇部で太宰の『晩年』のみ売れそうなので千部刷つたという）つくられ玄関に積んだまま、山崎は関西へ出かけてしまい、一ヶ月しても帰つてこなかった。それで仕方なく、寄贈用と予備を除く三五

○部位を取次と交渉して配本した。七月に本書が芥川賞を受けてびっくりしたが、山崎氏はそのとき、またもや関西へ出かけていた。十日程たってようやく尾崎宅へ現われ、再販の相談をしたが、「まことにゆつたりしたものである」と。それまで注文を断るのに骨を折ったが、ようやく八月に五千部つくって一息ついた。その後、十二年三月に、二人ではどうにも仕事やり切れなくなり、宮内寒彌君に手伝ってもらうことにした。十三年十二月には佐伯哲太君にも入ってもらった。宮内氏が辞めた代りに詩人の大木実君が入り、現在では佐伯、大木両君が事務をやっている。山崎氏と尾崎氏は「多くおしゃべりをし、碁を打ち、両君の邪魔をしてゐるやうな恰好である」と。

これで、他の文献には記されていない砂子屋書房スタッフの出入りの大体の時期が分った。

続いては宮内寒彌の「サウデスカ」なる一文。宮内氏（明治四十五年〜昭和五十八年）は砂子屋から『中央高地』を出し、芥川賞候補になった。昭和十七年には代表作『からたちの花』を大観堂（尾崎氏とも密なつきあひがあつた早稲田の古本屋）から出している。一時、砂子屋を手伝つたことは『日本近代文学大事典』にも出ていない。（大木実氏も同様で、職歴の一つに出版社員とだけ記されている。）この一文は、砂子屋内部の思い出ではなく、出入りした印刷

屋の主人について綴っている。その意味で珍しいものであり、周辺情報として貴重である。

「その頃、砂子屋に出入するひと達には、人物が多かつた」と書き出している。

その一人が、安田頼太郎氏で、氏は砂子屋刊の本では『沃土』や『縛られた女』などでの「細い美しい活字の持主として、又、印刷術の秀技を以つて有名であつた」と記す。

「そればかりでなく、氏の悠然として迫らざる人柄も有名であつて、月一度、集金を兼ねた氏が書房に現はれると、数日の間は、書房の空気が駭蕩として来る程であつた。まことに好漢であつた」と。

ただ、その人柄のせいも、急ぎの仕事依頼した場合も約束の期日に印刷が上らなかつたりするので、少しいららさせられた。新聞広告が先に出て注文がどんどん来たりしてこちらが困っていると難詰しても、氏は一言、あわてず悠然と「サウデスカ」と言つて微笑するばかりだつた。それで問答は終りになつたと。取引先の窓口となつていた宮内氏には、山崎氏、尾崎氏にはない気苦勞もあつたに違いない。

私の蔵書の奥付を調べてみると、庄野誠一『肥つた紳士』にも、「印刷 安田頼太郎」とあり、住所は「東京市

淀橋区柏木一ノ一八」であった。こういう一寸した発見も古本を見る面白さだ。

そして佐伯哲太が「始め」を書いている。この佐伯氏は『あの日の日』では齋木哲太となっている。その後結婚して齋木家に養子で入ったのだろうか。氏はその後「早稲田文学」の編集者となり、一、二年後、中学教員になった。氏も早稲田大の国文科の後輩だったが、卒業後、父の死後は郷里にいた。就職しようと思いい、名古屋の友人を訪ねた帰り、上高地の温泉ホテルに青柳優さん（筆者註：この人も早稲田大英文科出身で、尾崎、浅見氏と親交があり、『批評の精神』『文学の真実』などのすぐれた評論集を出した）を訪ねる予定だった。しかし青柳氏は上京中で、半月程泊っていたところ、全く思いがけなくそこで尾崎さんに逢ったという。尾崎氏から砂子屋への就職をすすめられ、渡りに舟と喜んでお願いした。この宿での尾崎氏の美人相手の行状は尾崎氏の『浴室長期抗戦』にくわしく描かれているそうだ。昭和十三年十二月二十三日、氏は尾崎氏に連れられ砂子屋を訪れ、山崎さんと宮内君に初対面した。夕方になって、入社祝いの宴を設けてもらった。以下は編輯室での空間と人物と雰囲気が生きた描写されているので、少し長いがそのまま引用しておこう。

「編輯室で酒を飲むのは始めてのことだといふ。書房神聖。

だが今日は特別とのこと、黒檀の事務机を真中へ出して、四人で囲んだ。酒は山崎家吟醸の鴻の澤である。前を見ても、後をふり返っても、右を眺めても、左に眼を向けても、本ばかりの中で、私はキョロキョロしながら杯を重ねた。博識な山崎さんの口から迸りでるやうな言葉、言葉、言葉。負けず劣らずの尾崎さんが、時々得意のユーモアを飛ばす。宮内君の表情巧みな話しぶり、それに東北弁、関西弁、関東言葉、なんでも使ひわけ（私はこんな人を知らない）。それらが入り交ってユーモアはユーモアを生み、話は枝から枝と延びて涯しがない。そこからもりあがる和やかな、それでゐて少しもゆるみのない雰囲気。一年ほど田舎にゐた私は少々とまどひながらも、少しづつ心が軽く浮きたってくるのを感じた」と。

この一文の載った「文筆」も佐伯氏の担当のようで、巻末に後記を書いている。書房の庭に柿の木が二本あり、それが食べられる柿で、出入りの魚屋や製本屋、製函屋、印刷屋の営業の人みんなが味を知っている、などと記している。庭があるから、和風住宅の事務所だったことが分る。(註)

最後は書房主、山崎剛平氏の「書房五年」から。今までの出版を顧みて、自身快いことの第一は、皆文芸畠の本ばかりで、「第一小説集」を出した作家たちがその後も活躍している人が多いことだ。それに出した小説で五つの文学

れる。失ったり亡くなった恋人や思い出の中の少女を哀切あひせつに唱った詩が多い。また全体を通して、神戸らしい海辺を舞台にその自然を背景にして、夜汽車や帆船、旧家跡、棧橋などが象徴的に唱われている。

せつかくの機会だから、ここでは短い詩のみ三篇、引用しておこう。

はがきにしろす

運命のやうに知慧のやうに

湛へてある海を

船が行く。

どこへ行くかをよく知ってゐるやうに、
又、どこへ行くかを少しも知らないやうに
一つの帆が行く。

樹

樹に潤ひがある、

人に渴きがある。

樹はいのる、人はねがふ。

私達何を願はうか、

うなだれて樹のやうに祈らうか。

小鳥

小鳥の声が何故あんなにうれし相なのか

小鳥の声がなにゆえ私をよろこばせるのか

落葉した雑木林で

何の屈托もなく勢よくうたふ。

小鳥よ、そのよろこびはどこから得たのか。

私はここで聞いているよ。

(以上、本書には長い詩が多いので、引用の選択を誤ったかもしれないが、お許し願いたい。)

自伝的背景が感じられる詩からは、橋本氏は学校卒業後(？)、朝鮮半島、台湾など(それも不確かだが)外地を仕事の関係で転々とし、その後故郷の兵庫の村へ戻ってきたらしいという推測はできる。それ以上のことは皆目分らない。

ただ、本書の序を、哲学者、思想家である若き日の土田杏村が十頁にわたって書いているのが注目される。橋本氏はあとがきで、出版に際し、詩友、福原清君、竹中育三郎(郁)君、詩人倶楽部(省略)の諸君とともに、序を下さった土田杏村君に感謝する、と記している。君というのは大体は同年輩の親しい友人を呼ぶとき付けるものだろう。だ

から杏村とも、割に親しい関係だったのか、とも思える。

私は土田杏村については、古書展でその著作は時たま見かけるものの、不勉強であまり関心も抱いていなかった。しかし、この序文を読み、少し調べてみようかという気になった。(むろん、一時の付け焼刃にすぎませんが)

まず、序文の主旨を要約して紹介しておこう。土田氏は最初に、小泉八雲の著作に見られる生類の輪廻転生の思想を紹介し、橋本君の詩集を読んでいて、この思想を想起したという。「私は今橋本君の詩を読む、と、其の詩は人生の最も深いところに横はる輪廻の声だとしか感じられない。我々の人生は決して単独な、お互ひに離れ離れのものではない。ずっと深いところへ浸ると、其處では真如や無明の根源になって居ると信じられる生命の大海の波浪が聞かれる。其の波浪の音は屢々我々の現実の世界へ漏れ聞える。」と。

そして、詩の一節である、

「こんな月夜には／きつとどつかで歌う声か、／それとも笛の音がするものだ」を引いて、それが深いところから来る、我々東洋詩人すべてが予感する音だ、と記す。

「其の波浪を潜って我々は其の大海の中へ没入したい」とも。

このような思想は、私には深層心理学という、ユングの

(東洋的)「集合無意識」の観点と共通するものではないか、と思う。当時、ユングの著作は日本にすでに入ってきていたのだろうか。橋本氏が僧侶であったとすれば、仏教的、東洋的無意識を自ら身に着けていたとしても当然であろう。さらに、私が引用した前述の「樹」を引いて、「此の波浪から現実の中へ押し寄せて来る不思議な律音に悦樂し、誘惑せられて居るもの様に見えた」と言う。そして「君の生命の奥に湛へた哀愁は、センチメンタルと呼ぶには人間に余りに原始的なものだ。其れは永遠なる輪廻の持つ哀愁だ」と書いている。

このように、単なる一般論ではなく、橋本氏の詩の一節を四度も各々引用して杏村の主張を展開している。ただ、私見では、杏村の独自の思想に引寄せて、それを説得的に例証できるものを橋本氏の詩の中に多く見出したようにも思えるが、それにしても、ユニークな示唆に富む指摘に満ちた実に堂々たる序文である。

私は手始めに(安易ですが)まず、例の『日本近代文学大事典』で、土田杏村の項を見てみた。

杏村は明治二十四年佐渡に生れ、新潟師範を経て東京高師に進む。大正四年、京大哲学科に入る。そして引きつづき六年間、大学院に在籍した、とある。杏村は京都で十数年間、学生生活を送っている人なのだ。その頃から早くも

著作活動を始めているが、若い頃は詩や文学にも関心が深い、いわば文学青年であったようだ。その後、杏村は生涯、在野の哲学者、評論家として活躍し、生涯に六十一冊の著作を遺している。その思索のテーマは実に広範囲にわたっており、専門の哲学の他に文学、短歌、国文学、美術、仏教、恋愛論にまで及んでいる。古本目録を見ると、昭和期の著作は第一書房刊行の本が圧倒的に多い。そのせいか没後、第一書房から全十五巻の全集が出ている。昭和九年、病気で四十三歳の若さで亡くなっている。初めて知ったことだが、日本画家、土田麦庵の弟、というのも興味深い。杏村自身も素人以上の絵を描いたという。

私は正直に言って、今まで一冊も杏村の本を読んだことがない。だから本稿を書くのはおこがましい限りだ。

それでも、ふと思いつ出したのが、今年の初めだったか、まだ三宮のサンバルにお店があった頃のロードス書房の店頭均一コーナーで見つけ、買っておいた論文別刷の冊子「土田杏村と山村暮鳥―往復書簡を中心に」のことである。著者は上木敏郎氏で、今みてみると、例の『大事典』の杏村の項の執筆者でもあり、どうやら杏村研究の第一人者の方らしい。(後に『土田杏村と自由大学運動』という杏村のすぐれた評伝を出しているのを知った。)往復書簡は、手紙を交わす両者の肉声や本音がよく窺われるものだから、面白

そうだと思いい、気紛れに入手しておいたものなのだ。それがいけなく、こんな形で役に立つとは思ってもいかなかった。私は「おーい、雲よ」の詩で有名な山村暮鳥の詩集もイタミ本は一、二冊入手しているものの、じっくり読んでいないのだが、この際と思いい、その論文を一息に読みおえた。

顧みると、ロードス書房で安く入手した本や雑誌、昔の神戸の古書目録などで、原稿のネタになったものは数多い。感謝するとともに、今後の目録販売での発展を祈るばかりだ。

さて、この論文は上木氏が両遺族の方々から借覧した二人の往復書簡を数通ずつ引用しながら、その背景や自伝的事実を五十二頁にわたって解説した貴重なものである。

最初の書簡は暮鳥宛てではなく、当時京都大学哲学科二年に在学中の杏村が大正六年に後の夫人となる波多野千代子さんあてに出したものだ。これによると、当時杏村は雑誌「第三帝国」(筆者註・民本主義の茅原華山が主宰・発行した社会評論誌)に詩壇の批評を寄せており、そこで山村暮鳥の刊行した『聖三綾玻璃』(大正四年)を取り上げて杏村が主張する「神秘的象徴主義」が具現化されたものをその詩の中に見出したことを述べている。又、上木氏によれば、杏村とともに萩原朔太郎も暮鳥の詩を高く評価し、大

あとがきに代えて

本書全体をふり返ってみて、ふと気づいたことがある。砂子屋書房のことを書いた稿では、皎明社や出入りした印刷屋の主人、安田頼太郎氏、第三次「三田文学」編集部の稿では五峰堂などの印刷所が出てくることだ。言うまでもなく、著者の原稿が出来上っている、印刷所や製本所の人たちの地道な働きがなくては、本や雑誌は一冊も造れず世に出せない。印刷人といえば、内堀弘氏がそのすぐれた評伝『ボン書店の幻』で描いた鳥羽茂氏も、一九二〇年代にモダニズムの詩集、三十点程を自社の活字でこつこつ印刷した独りだけの印刷屋主人だった。私も旧著『関西古本探検』で、戦前、同人誌「リアル」（北川桃雄主宰、十三冊で発禁になった）や戦後は京都の文化人を結集した「骨」を発行し、京都で関西の多くの若手詩人の詩集を世に送り出した文童社社主、山前実治氏（詩人でもあった）のことを少し紹介したが、氏も双林プリントを経営する世話好き

の印刷屋主人であった。ここで、詩人、大野新氏も働いていた。また、「日本古書通信」連載の小田光雄氏の一文によれば、木村榮治氏経営の小出版社、七月堂も印刷所を兼ねていた。七月堂は詩集や同人誌が専門分野で、若き日の四方田犬彦氏や沼野充義氏らが同人の「シネマグラ」やフランス文学者たちの「散」、松浦寿輝氏らの「麒麟」などを出していたという。

七月堂から出した詩集では、松浦寿輝『ウサギのダンス』や朝吹亮二『密室論』などが高い評価を得ている。「ユリイカ」二〇〇三年四月号の「詩集のつくり方」特集で、木村氏もインタビューに答えており、詩集づくりの本音を語っている。それによれば、七月堂の入口で、二年間程、古本屋もやっており、あの「彷彿月刊」の編集長、故田村治芳氏が仕入れや店番をやっていたという。

また、神戸の詩人、林喜芳氏の『神戸文芸雑兵物語』に

よれば、氏は十代後半から神戸の印刷会社で働いており、その近くの内外印刷では「キネマ旬報」を一年程印刷していたし、市川合資会社では竹中郁の初期詩集や「羅針」を印刷していたことを記している。大正末から昭和初期にかけての神戸文学史の貴重な証言である。

さらに、明治、大正にわたって多くの夢二画集の出版を始め、思想、教育関係の良書や「白樺」「月映」などを発行した洛陽堂主人、河本亀之助は国光社印刷部長、千代田印刷所経営を経て、洛陽堂印刷所も経営していた。亀之助の生涯と仕事については、田中英夫氏が貴重な労作『洛陽堂 河本亀之助小伝』（燃焼社刊）で詳述している。（実は、私は本になる前の連載の小冊子を毎号送っていたっていた関係で、出版のお手伝いをした。）河本氏は私がかつて探求してまとめた大阪出身の名高い文芸書出版社、金尾文淵堂主人とも深いかわりがあった出版人である。

また、杉浦明平氏のエッセイ「〈未成年〉のこと」（『本の置場所』所収）によれば、杉浦や立原道造、寺田透、猪野謙二などが参加して出した同人誌「未成年」は昭和十年創刊され、昭和十二年、九号で終刊となった。各三〇〇部か二〇〇部だったが、本郷二丁目の横丁にあった日興社で刷ってもらったという。数軒の書店に委託で置いてもらったものの、十五部程（創刊号）しか売れなかったという。

しかし今では近代文学史上、貴重な同人誌となっている。

また福島県に住む詩人で、同人誌「黒」を主宰、「地球」同人で全国的に評価が高い斎藤庸一氏も印刷業を営む人である。斎藤氏は昭和二十二年に草野心平に出会って以来、その縁で昭和二十五年から昭和三十四年までの十年間、第二次の「歷程」三十三冊を印刷、製本している。ただし、終刊までの五、六冊はその費用が未払いのままだったであろう（『詩の外へ詩の内へ』所収のエッセイによる）。本書に登場する土方定一や坂本遼氏とも交流があった。

もう一人、時代小説の大家、吉川英治氏も小説家になる前の下積み時代、十三歳の頃、少年印刷工の経験があったと年譜で見たことがある。

これらは文芸と密接にかかわった印刷者たちのわずかの例をアトラダムにあげたにすぎないが、本書でも引用した、ある座談会で野口富士男氏が語っているように、印刷所を通してみる文壇史」というのも出版史を見直す新しい視点になるかもしれない。幸い、各々の本には奥付に印刷所が表示されているので、探索の手がかりになることだろう。（ただ、戦前の本には、印刷人名だけで会社名が出ていない奥付もある。）

もう一つは、後に小説家や詩人として活躍する人たちが多く集っていた編集部のことを本書でも四篇程書いている

〔初出一覧〕

- 元創元社編集者の未読小説を読む……「旅の眼」121号（平成27年6月）
著者の怒りに触れる編集者の困惑……「旅の眼」120号（平成26年9月）
あるヴェテラン児童文学編集者の喜怒哀楽……「旅の眼」122号（平成7年11月）
元河出書房編集部の方々……「塔の沢倶楽部」8号（平成26年2月）
神戸文芸史関係の古本探検抄（部分）……「ほんまに」16号（平成26年9月）
貴重な私家本との出逢い……「旅の眼」124号（平成28年9月）
以上以外はすべて書下し。

高橋輝次（たかはし・てるつぐ）

編集者、エッセイスト、アンソロジスト。

昭和 21 年、三重県生まれ。神戸で育つ。大阪外国語大学英語科卒。昭和 44 年に創元社へ入社するが、病気のため、平成 2 年に退社。その後はフリーの編集者となり、古書についての編著書を多数刊行。

主要著書に『関西古本探検』『古書往来』、『ぼくの古本探検記』、『ぼくの創元社覚え書』など。主な編書として『原稿を依頼する人される人』、『誤植読本』、『古本漁りの魅惑』、『誤植文学アンソロジー 校正者のいる風景』など。

編集者の生きた空間

—東京・神戸の文芸史探検

2017 年 5 月 20 日 初版第 1 刷印刷

2017 年 5 月 25 日 初版第 1 刷発行

著 者 高橋輝次 ©

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

装訂／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1596-1

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。